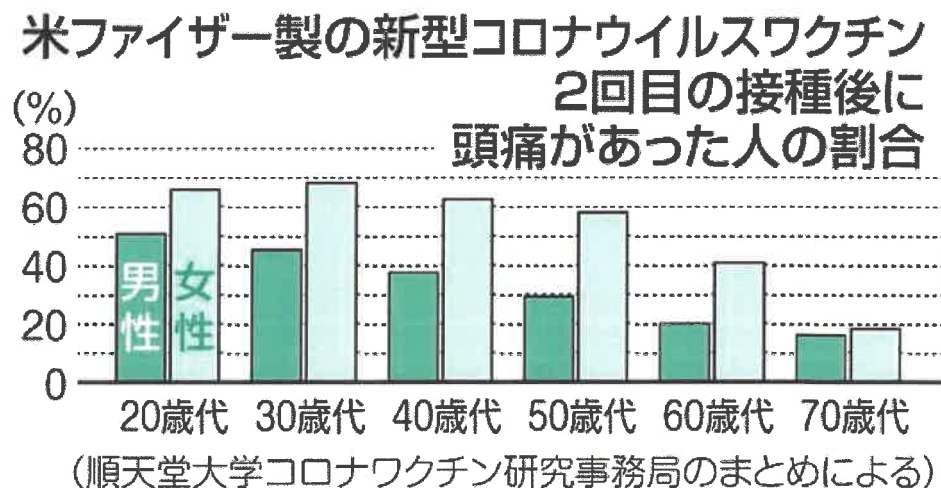


ワクチン接種に伴う副反応について

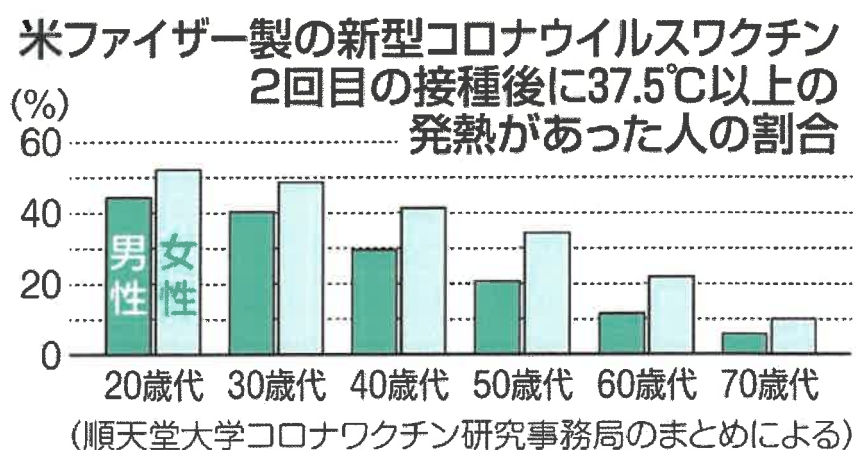
厚労省は、「発症予防効果などワクチン接種のメリットが、副反応などのデメリットよりも大きい」としてワクチン接種を勧奨している。

順天堂大学医学部の伊藤澄信客員教授らの研究チームは、米ファイザー製のワクチンを接種した医療従事者ら約2万人を対象に、接種後に毎日、体温や副反応の症状を記入してもらう「健康観察日誌」をもとにした調査を実施。[中間報告](#)をウェブサイトで公表している。

それによると、接種部位の痛みが出た人の割合は、どの年代でも1回目と2回目でそれほど変わらなかったが、**37.5℃以上の発熱や全身倦怠感、頭痛などの症状**は、いずれの年代も1回目より2回目の方が出た人の割合が高かった。



より副反応が出やすい2回目を見てみると、接種部位の痛みと全身の倦怠感については、70歳代に限り、女性よりも男性の方が多く症状がみられた。しかし発熱や頭痛では、どの年代でも男性より女性の方が症状を訴える傾向が強かった。



研究チームによると、2回目の接種後の発熱を訴えた人の割合は、20歳代では50.14%、30歳代では45.51%だったのに対し、60歳代では16.56%、70歳代では7.38%だった。2回目の後の頭痛では、20歳代が61.88%、30歳代が59.57%で、60歳代が30.13%、70歳代が16.78%で、発熱や頭痛といった症状では、年代による差が顕著にみられた。

研究チームは自衛官らを対象に、米モデルナ製ワクチン接種後の副反応の研究も進めている。